

白幽子史實の新探究

伊藤和男

序

一 白幽子傳の資料

二 巷間の白幽子傳

三 禪門内の白幽子傳

四 丈山と白幽子との師弟關係

五年 表

一 昨年の中秋のことであつた。北白川は上池田町、瓜生山（勝軍地藏の山ともいふ）の麓から山手へ路をとつて行つた。なんでも、以前は人ひとりやつと通れる位の路幅しかなかつたといふことであるが、今ではふたりは並んで通れる。路に沿うて「一枝の溪水」が縫ふが如くに流れてゐる。登ること五六丁、勾配は愈々急である。登りつめたところは石切場で、山腹が縦断せられ、恰も屏風のやうに眼のあたりに立塞つてゐる。兎に角本道から脇へ踏込んで、背丈を没する雑草の生ひ茂

つたおどろの路を我武者羅に踏分け、右往左往した擧句、漸く「白幽子巖居之蹟」とせる高さ五尺幅一尺位の碑を發見することができた。洞は碑の直ぐ後ろにあつて、雨露を凌ぎうる程の奥行はない、廂に充たる部分は恐らく陥没したのであらう。碑のあたりには木立なく、たひらにひらけ、名も知らぬ雜草がところせまきまで蓬蓬と茂つてゐる。しかし洞の巔に登れば寔に風致清絶、京の街街を指呼の間に眺めることができる。高士の隠るるに相應しい塵外の境とは方しくかかる淨域をいふのであらう。いはゆる「東山に高臥す」といふ氣韻は必ずしも支那の東山でなければ味へないものでもない、京の、この東山で高臥しても同じ風趣は出て來やう。

白隱は壯年の頃健康勝れず、鍼灸藥の如き外的療法では到底治癒できないいはゆる禪病に惱んでゐた際、洛東北白川の山中に巖居する白幽子（また單に白幽ともいふ）と呼ぶ隱者が難病を治癒するといふので、この隱者を親しく訪ねてなんそ轉酥その法と稱する一種の内觀修養法を傳授せられ、爲に九死に一生を得たといふ體驗録が『夜船閑話』^①であることは何人もこれを熟知してゐる。併し乍ら同書のうちに白幽子の言行が如何にも奇矯に富むかの如くに記されてゐるところから、白幽子なる隱士が歴史的に實在してゐたか否かといふ問題は古來尠からず物議を醸したらしく、甲論乙駁、今におき尙ほ明確な定説が得られてゐないやうである。

もともと白幽子その人は自ら求めて塵寰を避け、人迹稀な雲壑青松の間に遁世したのであるから由緒素性の知られやう筈もなく、またそれを明めんとすることすらが既に白幽子の本懐に乖くわけである。従つて、かかる隱逸の史實を探ることは全く無用の業とさへ考へられぬでもない。けれども世には崑崙の寶珠の如く、自らは深山の土壤のうちに没せんと欲して而も竟に没し得ざる底のものもありうるであらう。人營營としてこれを争ひ索むるは果して寶珠の徳によるのであらうか、人の至情によるのであらうか。また古語に、「桃李言はざれども下自から蹊を成す」ともいはれる。白幽子の如きは方しく崑崙の寶珠であり、桃李にも儔ふべき隱君子といふべきであつて、遠塵の境に草庵を結んで雅懷に游んだ安逸者流でなくして、それこそ何ものにも代へ難いこの世に於ける最も切實な生活を生きた人と看なければならぬ。私をして白幽子をひたぶるに索めしめ、私をして再三、瓜生山巔の窟前に佇立せしめたるものは、これ全く白幽子の爲人の力に外ならぬ。

白幽子は單に白幽子その人として探究さるべきでもあるが、いはば白隱の師であつたといふ點にこそ吾吾の充分な關心がかけられる。尤も輦酥の法の如き心統一法が禪の傳統から見て異解であつて正統でないとの理由から、今日宗門の嫡流を汲む人人によつて左程尊重されぬにしても、白隱に對する白幽子の感化の決して尠くなかつたことは看のがす譯にはいかないと思ふ。従つて若し白幽子が歴史的に實在してゐたことが確證せられるならば、白幽子の精神は、禪の思想には直接關與し

ないまでも何らかの意味に於て白隱を通して活かされてゐるといへる譯である。

斯様に小論攷の主なる關心事は、白幽子が歴史的に實在してゐたか否かといふ點に存するのである。古來白幽子を全く事實無根の架空的人物として抹殺せんとし、よし抹殺しないまでも白隱が自己の體験を莊嚴する爲に自説を白幽子なる隱士に假託したものであるとなす向きも存するが、私にかかる先入主を極力廢して一一資料を俟つて素地から探究して行きたいと考へる。

私が久松抱石先生の誘掖によつて、甫めて『夜船閑話』を繙く機縁に恵まれたのは既にひと昔前のことで、當時藥篋に親しみ勝ちであつた私に先生が先づ薦められた修身書こそ方しく本書一卷であつた。その頃私も白幽子は恐らく歴史上の人物ではなからうと私斷し、爾來白幽子に就いては全然これを閑卻した譯ではなかつたが、殆ど留意しなかつた。ところが一昨年の中秋、圖らずもそのむかし白幽子が隱栖してゐたと傳へられる洞窟の遺蹟や墳墓を探るを得、またその後偶々白幽子傳に關する二三の資料を涉獵することができたから、茲にそれらの顛末を誌して大方の示唆と提撕とを仰ぎたいと思ふのである。

一 白幽子傳の資料

白幽子に關する文獻は一般巷間に流布したものと、禪門内で行はれたものとの二種に大別することが出来る。即ち、

(一) 巷間のもの

イ、藤井象水著『白幽子傳』

ロ、伴蒿蹊（閑田子）著『近世畸人傳』正・續

ハ、瀧澤馬琴著『玄同放言』卷三下・第四十八事「白幽子異傳」

ニ、宮地嚴夫著『本朝神仙記傳』

(二) 禪門内のもの

イ、白隱撰『夜船閑話』

ロ、同 『寒山詩闡提記聞』

ハ、同 『遠羅天釜』

ニ、同 『壁生草』

ホ、東嶺撰『獨妙禪師年譜因行格』

ヘ、大觀撰『獨妙禪師年譜補註』

である。なほ以上のほか富岡鐵齋の撰文（瓜生山巔の碑文）も存するが、これらを一一對照すると

き何れが正しいか即断し難く、その所説は區區異なる如くである。また『大日本人名辭書』や『日本畫家大辭典』或は『書畫骨董辭典』などにも散見するが、これらは直ちに信憑し難い。白幽子と直接交渉があつたと看られる主要人物は白隱と石川丈山とであつて、『夜船閑話』に従へば白幽子は丈山の師として登場してゐるが、この點に就いても一應の検討がなされねばならぬ。

次に右の諸文献の一一に就いて吟味すべきであるが、その前に、最近發見せられた重要にして信憑するに足る二つの資料に就いて述べ、これらを證據として従來の文献の價値を批判する方法をとることが今の場合最も便宜ではなからうかと私は考へる。

白幽子の靈名記 第一に擧げらるべきは、乘願院^②所藏の白幽子の靈名記(過去帳)であつて、表紙には「第一番靈名記」と誌され、これ以前の靈名記は焼失して傳へられてゐないから當寺としては最古のものに屬する。本靈名記は寶永四年(二三六七年)十月九日から享保十四年(二三八九年)十二月までの靈名を載録したもので、當山第八世映譽の代に收められたものである。

本靈名記二十頁表に左の如く録されてゐる。(口繪参照)。

同 廿五日

由緒不詳 生國武州石川氏

松風窟白幽子

石川丈山末弟近習六十四才卒

廿三日
山落死ス 罹病

村中

住山四十八年十六才より

「同廿五日」とあるは眞如堂の北、通稱芝の墓に現存する碑銘と全く同一で、寶永六年己丑七月廿五日（墓碑には初秋二十五日とある）を指し、また「廿三日」とあるは恐らく白幽子が山から墜ちた日時なるべく、その後二日経て廿五日に歿したものと推定される。

なほ靈名記が北白川の當寺に藏せられながら、墳墓のみが前記芝の墓に離れて存する點が不審に思はれぬでもないが、この芝の墓は當寺内に存する墓とともに舊く當寺の監理に係るものの如くであるから決して怪しむに足らない。兎に角この靈名記記載の事實は從來行はれた自餘の傳記の如何に拘らず最も信頼するに足るものであらう。

白幽子の眞蹟 更にいま一つ重要な資料は白幽子の眞蹟^③であつて、それには左の如く記されてゐる。（口繪及次頁參照）。

この眞蹟は『畸人傳』所載の「謹志箴」^④と全く酷似した八分體はつぶんたいのものであるから白幽子の眞蹟な

(六寸五分)

華陽白川山松風窟

白幽子箴

若無記性一日讀孟子
學問之道無他求其放
心而已矣忽悟曰我心
不曾收得如何記書遂
閉門靜坐不讀書百餘
日以收放心却去讀書
遂一覽無遺

元祿拾一戊寅中煇日

慈

(八寸七分五厘)

(八)

ることは疑を容れない。また思想の上からいつても、これを白幽子に歸せしむるに足るだけの典據がある。といふのは、その内容から察するに白幽子は程伊川や朱子派のいはゆる「主一無適」の思想に荷擔してゐたことが推定せられるが、この消息は既に白隱自身によつて『遠羅天笠』のうちに敷衍して述べられてゐるからである。いま「謹志箴」を擧ぐれば左の如くである。(次頁参照)

また嚮の「白幽子箴」に存する幽なる歎印も、瓜生山巔の鐵齋の碑文に「白幽子名慈俊」とあると照合すれば、慈俊の慈を採つたものと想像せられ、白幽子の歎印なることは間違ひないであらう。しかし慈俊なる白幽子の名を鐵齋は一體何處から索めたか、その典據はいま以て審かでない。なほこのほか一二眞蹟の現存することも確聞するを得

謹志箴 白幽子

夫長於雲壑青松下
無有游觀廣覽之知
顧有至愚孤陋之累
晏然哀吾生之須臾

平日好讀書不求甚
解窺聖賢之道不慕
榮利安貧不蔽風日
一褐一瓢屢空不憂
今日而俟天命而已

だが、いま直ちにこれを公にするまでに至つてゐない。

白幽子の墓碑 更にいま一つ附言すべきは墓碑に就いてであるが、芝の墓に現存する墓碑には左の如く誌されてゐる。

表、松風窟白幽子之墓

右、白川隠士

左、寶永六己丑初秋二十五日

背、白幽子墓舊在此所明治三十四年某月有竊去之者余恐古蹟亡滅因謀有志重修之云

明治三十六年四月 鐵齋外史

右の撰文によつて明かなる如く、現存の墓碑は當時のものではなく、當時の碑文には『畸人傳』所載の如く、

表、松風窟白幽子之墓

横、白川山居隱士

背、寶永六己丑初秋二十五日

とある。聞けばこの墓碑も最近東京市内の某墓地で發見せられたといふ。

斯様に白幽子の靈名記の儼存が今日明かとなり、眞蹟も『畸人傳』所載のもののみならず二三發見せられたことも明確なる以上、輦酥の法が事實白幽子によつて白隱に傳授せられたものか、白隱によつて白幽子に假託せられたものか、その穿鑿は姑く措くとして白幽子の歴史的實在性には疑問を挾む餘地は毫も存しないといはねばならぬ。

二 巷間の白幽子傳

若し斯様に靈名記を絶對的證權として白幽子傳を探究し行くならば、これと齟齬する自餘の諸傳は悉く抹殺さるべきであるが、しかし無論この靈名記のみによつて白幽子傳の全貌が悉く陽あはにせられたとはいへないのであるから、靈名記に準據しつつひと先づ從來の研究の成果を顧み、棄つべきは棄て、採るべきはこれを精細に吟味した上で採擇し、依つて以て靈名記で不明の箇所を修補すべきが至當であると私は考へる。尤も靈名記記載の事實の眞偽に就いても疑へば疑ひうるが、いまの場合これ以上に信憑しうる典據が發見されないものであるから一應これに絶對的に信服するのほかにと思ふ。

畸人傳「畸人傳」正編では、白幽子を全く架空的人物として抹殺せんとし、「英雄（註、白隱）人を欺くにて、若し其の意を著はさん爲に、假りに此の人をまうけ、白川の幽人をもて名とせるもまた知るべからねども云々」と疑つてゐるが、同書續編卷尾の附録では、この前言を翻して實在の人物となしてゐる。といふのは、金澤の僧若霖（字は桃咲）の著した「宜遊草」なる詩集に、訪白幽子詩二首、

秋興招吾派白水 嵐光踏破訪幽踪

山村籬外一枝菊 石徑耳邊十里松

瀾戸不厭遊客扣 岩扃只有懶雲封

遠來爲問山居好 冷露未晞鳴艸蛩

又、

美看幾時隱清時 獨倚石屏借晚曦

一徑莓苔餘菟跡 半肩薪棘對仙基

市寰日月本非別 洞裏景光稍似遲

除却山中松柏翠 秋風搖落更無私

が收められてゐるといふことと、「謹志箴」（前出）なる白幽子自筆の作文が存するといふ二つの理

由からである。それにも拘らず、「或人曰く、城の白河の山裡に巖居せる者あり、世人是を名けて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閱みし、人居三四里程を隔つ。人を見ることを好まず。行く則是必ず走つて避く。人其賢愚を辨することなし。里人専ら稱して仙人とす。聞く、故の丈山氏の師範にして精く天文に通じ、深く醫道に達す。人あり、禮を盡して咨叩する則是、稀に微言を吐く。退いて是を考ふるに大に人に利ありと。此において、寶永第七庚寅孟正中浣、竊に行纏を着け濃東を發し、黒谷を越へ直に白川の邑に到り、包を茶店におろして、幽が巖栖の處を尋ぬ」と錄されてゐる『夜船閑話』冒頭の一文を疑ひ、白隱が白幽子を訪ねたのは寶永七年であつて白幽子は既にその前年寶永六年に歿してゐるべきであり、兩者は到底相會しえた筈はないから、「畢竟隱士の名をかりて、丈山の師也、壽二百歳にも過ぎたらむなど、仙の如く取なして、其示説を神にせらるといはむか。あるひは老後、とし月の空記得のまゝに錄したまふといはむは難なし。猶世によく識る人もあらむ」といふ疑問を残してゐる。

玄同放言 更にいま一つの重要な資料を舉げておかうと思ふ。それは馬琴（嘉永元年・二五〇八年・十一月六日歿）の著した『玄同放言』に「白幽子異傳」の項があり、それに據ると左の如く記されてゐる。

「享和壬戌（註、享和二年・二四六二年）の秋。余京攝に遊びし比。古書をあさりて。多く市に閱せし

中に。雪齋紀事といふ古寫本ありけり。その書の中に。白幽子の事を載せたり。假初に見すぐして。購ひ得ざりしは遺憾のこりよしけれども。今にしてせんすべなし。しかれどもその大略を記憶したれば。要を提りてこゝに書きつく。雪齋云。予總角の比。家兄に俱して。白河なる白幽子を訪ひしに。世には仙人のごとくいひしかども。見ると聞くととは異なり。坐邊に土鍋など取りちらしたれば。火食もするなるべし。その素生を問ひしに。石川丈山先生に、使はれし僕なりしといひき。わが兄詩を作りて示せしに。和韻も出來ず。文字篇なき人と見えたり。座右には。三重韻一卷の外。藏書もなかりしといへり。又云。白河のほとりにて。彼老人の事を聞きしに。白河村にて。年忌などあるをりに。招きよすれば。歡びて來ざる事なし。飲食など。常人と異なることもあらず。衣類の破損するときは。村里に出で。乞ひ受けて着用せしとぞ。以上。この雪齋紀事は。をさをさ寛永年間の事をしるしつけたり。記者は京都の人なるべし。筆譚すべて華洛の事のみ多かり。させる隨筆ならねども。白幽子の事は實錄なるべし。白隱の夜船閑話。及壁生草には。白幽子をさしも神仙の如くに書きなしたり。畸人傳五卷にも。亦夜船閑話。闍提記を載せて。石川丈山の師とし。二百歳にも餘れる人なるべしといへり。續畸人傳五卷には。相摸國。金澤の僧。若林(霖)が詩集宜遊草に見えたりとて。訪白幽子。詩二首を抄出し。又白幽子が自筆の作文なりとて。その書一ト頁ひらを摹出し。又白幽子が墓は。眞如堂の北にありとて。その墓誌を載せたり。且云。墓石の

背に。寶永六年己丑。初秋二十五日とあれば。白隱和尚の。この隱士を訪ひしといふ。庚寅正月は。その翌年の事なり。畢竟隱士の名を假りて。丈山の師なり。壽二百歳にも過ぎたらんなど。仙の如くとりなして。その示説を神にせらるゝといはん歟。あるひは老後。空記のまゝ録し玉ふといはんは。難なしといへり。既にその人ありしかば。その墓もあるなるべし。只その自筆の作文といふものは余がしる所にあらず。よしや眞迹なりとも。さばかりのものは書きもしたらんかし。これを隱者といふは可なり。これを神仙といふは不可なり。これを小文才ありし人なりといはゞ。猶可なり。これを博識通達の士といはんは過ぎたり。無門關。久響龍潭頌云。聞名不如見面。見面不如聞名。といへり。證するに雪齋あり。白幽にも亦いふべし。」

これに依つて看るに『夜船閑話』に端を發した丈山と白幽子との師弟關係には疑問の存することが分るであらう。而も『玄同放言』では白幽子は丈山の師でなくして却つて從僕であると明白にいつてゐる。この點に就いても更に吟味せねばならぬ。また右の引文中に看ゆる雪齋とは果して如何なる人物であるか、『雪齋紀事』とは如何なる書物であるか今はこれらを審かにし得ないが、もと江戸の俳人たりし雪齋に就いては『大日本人名辭書』にもこれを傳へてゐる。なほ右の記述は寛永年間のことを録したるが如くであるが、靈名記に本づく限り、寛永は白幽子の出世した正保(三年)の直前の時代であるから寛永年間にはまだ白幽子は生れてゐなかつたと看なければならぬ。それ故

この記録に全幅的に信を置くことは今暫く躊躇せねばならぬ。

藤井象水 また藤井象水(名は理定)撰「白幽子傳」は白幽子と交友關係があつたと自らいつてゐる象水の撰んだものであるから信するに足りると思ふが、白幽子の姓名素性に就いては一切不詳であるといひ、更に「余道人と交りを結ぶこと年有り時に或は之を訪ひ其志を問へば則云々、其道を問へば云々、皆洒然として人間の語に類せず。其幾んど儒者の言に反するあり、今具さに其言を述べざるは則ち敢て之を祕するに非ず、余亦其旨を得ざるなり」^⑤とも述べてゐるから、象水は白幽子と交りを結んでゐたとはいへ完全に意志が疏通してゐたと看することはできない譯である。また十餘歳で遁世したことは靈名記と一致するが、始め洛北某山に隠れ後、三年經て勝軍山に居を移したともいつてゐる。尤も一處不住の流離性は隱逸の常であるから、さもあるべきことと思はれるが、白幽子の行住坐臥を寫すに敘述全體がいかにも神僊めいた筆致に富み、實狀以上に誇張した節節が多分に看うけられるから到底ありのままを描寫したとは受取れない。この「白幽子傳」の筆者藤井象水は『先哲叢談』に據ると、藤井頼齋(『先哲叢談』『事實文編』第二十五に詳述せらる)の長子たりし人である。頼齋は筑後に生れ、もと眞名部忠菴と稱する國手であつたが後、感ずるところあり、七を投じて洛西鳴瀧村に住し、儒學を修めた人である。兎に角象水のこの「白幽子傳」は白幽子の日常の行狀を傳ふる以外に看るべきものはないが、ただ「元祿六癸酉年四月」の年紀を附して

る點のみが注目に値する。嚮の眞蹟「白幽子箴」が元祿十一年の作であることと照合して年紀の上では白幽子生前の動靜を傳へてゐることは間違ひなく、靈名記に本づく限り白幽子は當時四十八歳であつたことが知られる。

本朝神仙記傳　また宮地殿夫の『本朝神仙記傳』^⑥にも白幽子の消息を傳へてゐるが、敘述が荒唐で、享壽が文祿以前から元祿にまで及ぶ數百歳を算することになるから實在の人物の評傳としては受取り難い。それに白隱訪幽の事件を東山天皇の御宇となしてゐるが、これは古來疑義とされてゐた寶永七年（中御門天皇第二年）説を覆すことになり、白隱訪幽の事實を愈々確證せしむるものではあゝる。しかし時日の開きは僅少であるにしても、斯くいひうる爲には相當の理由を要することであつて、本書の筆致から察するに、嚴密な考證の結果から斯くなしたとは思はれず、やはり正しくは東山天皇の御宇でなく、中御門天皇の御宇とせねばならぬのではなからうか。^⑦従つてこの點からいつても、この傳記は左程信頼できないやうである。ただ關心の有たるべきは同書に白幽子の眞蹟として元祿乙亥九月九日附三社託宣のことを擧げてゐる點で、この眞蹟は嚮の「白幽子箴」に先立つこと三年、元祿八年の作であり、年紀の上からいつても白幽子生前の作なること明確である。またこれは私が實地討査したところと照合するに、北白川在某家所藏のものと同一物に相違なく、當家の老嫗の直話に據ると、中央に天照皇大神、右に八幡大菩薩とあり、（左は失念した）といふことで

あるから三社が伊勢神宮、石清水八幡宮、春日明神なることと照應して兩者が全く同一物なることには疑を容るる餘地はない。しかし惜しい哉、某家方ではこの眞蹟を目下何處へ修藏したかその有り處が分らぬといふ。

三 禪門内の白幽子傳

次に吾吾は禪門内で行はれた文獻に就いて論究すべきであるが、これらは多く嚮の眞蹟と併せて白幽子の思想を探る上に不可缺のものであつて當面の問題には直接關係しないから茲ではその詳論を割愛することとし、ただ白隱門下の高足東嶺の撰述に係る「獨妙禪師年譜」中の「白幽真人」の註記のみを擧げるに停めておかうと思ふ。それには左の如く録されてゐる。

未詳姓氏。幼事石川丈山。因病辭求養生之術。年及弱冠。遇一異人受(藥蘇)煉蘇法。獲鍊丹方。入山而隱。居無常處。比至古稀。暫住石氏隱棲詩仙堂。遂卜容膝地於白河山中。以爲憩息處。住數十年。不知其所終焉。後於若州山中而有逢人云。白河石匠某甲語予曰。白幽真人曾告我父。要求岩洞。父語幽曰。我闢石處。深穿似窟。若可意居焉。幽往爲居也。或請饗宴。或呈時菓。問候不絕。壽近九十而逝。書軸間在。今考。先師夜船閑話言石氏師範而保三百壽者。暗記失耳。依此論誤。有爲以先師好偶言人之謬。予先在京時。普討幽之事。始至白河之石匠某甲處。得其實也。

右の白幽子傳は『玄同放言』と同様、白幽子を丈山の師でなくして却つて弟子であつたとなしてゐる點に刮目せしめられる。また享齒を九十歳とし、神僊的敘述から脱して愈々人間らしさを強調してゐる。これは更に東嶺傘下の俊穎大觀によつて補註せられて、

珠曰。偶見或人草紙日記。曰。白河白幽子落谷而殂。實寶永六年己丑八月九日也。享齒四十餘。

因此見之。則三光老師傳中書曰。壽近九十而逝。恐老師之暗記乎。己聞提翁亦言。壽算閱三四甲子。(二百七十歳也)將其何爲是。

といはれ、また「居無常處」とは「漂泊丹但城若之間」であると説明されてゐる。そして右の補註の中、「落谷而殂」とあるは靈名記に「山ヨリ落チ死ス」とあると符合するが、歿年の日時、享齒ともに靈名記と一致しない。

東嶺のこの白幽子傳は自餘の諸傳中에서도信頼するに足るものの一つで、今日白幽子隱栖の巖窟附近一帶が花崗岩の産地であり、今におき石切場であることから推して勝軍山界隈の人文を如實に傳へてゐるから、たとひ疑問の存する點が多多あるとしても單に憶測によつて書かれたものでなく、尠くとも實地踏査の上で書かれたことはこの一事によつても容易に首肯できる。更に東嶺が白幽子の言葉として、「是謬公聞。予非醫非仙。只因病逃世而已。自愧上人遠來。」と録してゐるのは恐らく白幽子の爲人を遺憾なく傳ふるものであらう。

四 丈山と白幽子との師弟關係

斯くて白幽子が丈山の師であつたといふ説が白隱の單なる過褒に過ぎないとするならばこれに就いても吾吾は更に検討せねばならぬ。

先づ丈山の師友關係を見るに、『事實文編』十七の「石川丈山先生年譜」「石川丈山傳」の項に據れば師に僧悅心、藤原惺窩、林羅山、堀杏菴あり、操觚の友として田子元、戸花屋、管玄同等の存したことは記されてゐるが、白幽子とおぼしき人物は何處にも見當らない。丈山の自著『覆醬集』『北山紀聞』に索めても、若し白幽子と丈山との師友關係があつたとするならばそれに就いての感懷が何ほどの詩趣となつて頌出せられて然るべきであるのに、さういふ節は隻句だに見出すことはできない。しかし遺憾ながら『續覆醬集』はこれを參照し得なかつた。

ところで詩仙堂が一乗寺在に建立せられたのは寛永十七年（二三〇〇年）、時に丈山五十八歳であり、丈山の歿年は寛文十二年（二三三二年）、享齒九十歳であるから白幽子は丈山の晩年僅僅三十年の間に詩仙堂に出仕したかに想像せられるが、靈名記に本づく限り此頃白幽子は未だ少壯で丈山の歿年には二十七歳を算へ、而も十六歳入山説を採るならばそれ以前の極めて幼少の頃に短期間近習として出仕したのではなからうかと推定せられる。

斯様に丈山と白幽子との關係は文獻によつてはこれを積極的に檢證できないが、丈山が隸書に巧

みであり、白幽子が隸書にまがふ八分を能くしたこと、更には實地踏査すると勝軍山の巖窟と詩仙堂とは山傳ひに容易に往還しうるほどの近距離に存し、今日、中山山上に現存する丈山の墓碑^⑤は巖窟から纔か二三丁の咫尺の間に存することなどは其處に何らかの交渉がありえたことを偲ばしむるに充分である。併し乍ら靈名記によつても鐵齋の撰文によつても丈山と白幽子との直接關係は看られないやうである。即ち靈名記では白幽子は武州の産で、「石川丈山末弟近習」^⑥とあり、「事實文編」に徵するに丈山は三州の産で、父信定には三男二女があり、その長子が丈山であるから茲にいふ所の末弟とは三男であることが知られる。しかしこの三男が何人であつたかはこれを明白にし得ないが、「事實文編」の年譜には、

「慶長三年戊戌。公十六歲。遭先考之喪。東照大神宮在駿河。右衛門大夫松平正綱告之神君。曰。彼世々有功於我家。其子皆可居麾下。莫令他適。於是公及小弟三十郎共列麾下之士。其後神君命正綱曰。嘉右衛門者可爲近習。三十郎者可遣江府。故三十郎仕甲斐大納言之邸。是年神君到伏見。公奉從之。」

とあり、文中嘉右衛門は丈山の幼名、小弟三十郎とあるは次弟か末弟か知る由もないが、若し末弟とすれば白幽子はこの人の近習であつたといふことになる。

また瓜生山巖の碑文には左の如く記されてゐる。

表、白幽子巖居之蹟

背、白幽子名慈俊石川丈山之弟子石川克之弟也、晚年隱居此處嘗爲白隱禪師說內觀修養之法矣往年

余與同志相謀修其墓而今亦恐其巖窟及清泉湮滅再議建石以謀不朽

明治三十九年十月

鐵齋 富岡百鍊識並題

本文中、「往年余與同志相謀修其墓」とあるは嚮の眞如堂の北なる芝の墓を指すこと明かである。また茲に刮目すべきは「白幽子名慈俊石川丈山弟子石川克之弟也」とある點で、これは自餘の白幽子傳には全く看不られない斬新なものではあるが、この行文には二様の讀方があるやうに思はれる。即ち「石川丈山之弟子」を「白幽子」の述語と看るか、「石川克」と同格に看るかである。若し前者の如く白幽子が石川丈山の弟子で石川克の弟とすれば、後に述ぶる如く石川克も丈山の弟子であつたから、石川克、白幽子（石川慈俊）なる兄弟がともに丈山の弟子であつたといふことになる。かかる事實はありえても奇異ではないが、しかし靈名記に「石川丈山末弟近習」とあり、「事實文編」にも石川克とおほしき人物を丈山の弟子として明言してゐる事實から推して恐らく後者が正しいのではなからうか。その理由は、「事實文編」に徴するに、「寛文十二年壬子、公九十歳、春正月諸門生賀九十算。友人多寄雅詞祝之。二月公患眼。三月臥病。公自以爲遂不起矣。門生石克常侍側。扶其七茵云々」とあるが、茲にいふ門生石克とは石川克に外ならぬと考へられる。「事

實文編』では石川丈山を石六々山人、藤原惺窩を藤惺窩とも呼んでゐるからこの筆法を以てすれば石克とは石川克を指すものと推定してよい。その他隨處に石克又は克の名が見えてゐるが、この人は餘程重用せられた側近の門弟であつたらしく丈山の臨終の看護をしたのも彼であつた。ところで石川克の弟に石川慈俊なる人が居たか否かは私の蒐集した範圍内の資料によつてはこれを明白にすることはできない。しかし靈名記記載の如く白幽子は石川姓であるから、この點だけからいへば鐵齋説のやうに白幽子を石川克の弟と看られぬこともない。また石川克は丈山の門生ではあるが、やはり石川姓であるから假りに彼が丈山の末弟で同時に門生であつたとするならば、靈名記の如く石川克の近習が白幽子といふことにもなる。何れにしても白幽子と丈山との交渉は間接的であつて、白幽子が詩仙堂に出入したことがあつたとしても嚮に一言したやうに極めて幼少の頃で、當時餘り重用された人物とは考へられない。

白幽子の史實に就いては差當り以上の蕪雜な論結で満足するの外はないが、いま一つ最後に残された重要な課題は白隱訪幽の年紀に關してである。時に白隱二十六歳の壯年の頃であり、『夜船閑話』の撰述は同書後記の年紀寶曆丁丑とあるによつても知られる如く、白隱が七十三歳の高齡に及んでのことであつて、「古へ二三兩の襪を着るといへども、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者今既に三冬嚴寒の日といへども、襪せず、爐せず、馬齒既に古稀を越へたりといへども、指すべき

半點の小病もまた無きことは、彼の神術の餘勳ならんか」と録してゐるところによつても明白である。従つて、この消息は白隱が晩年に及んで半世紀の往時を回想して筆録したものとすれば、如何なる強記を以てしても年紀の正確を期し得なかつたことは想像するに難くない。それ故、「畸人傳」にいへる如く、「あるひは老後、とし月の空記得そらおぼえのまゝ録しるしたまふといはむは難なし」と看るほかないであらう。

五年 表

次に靈名記を典據として、白幽子と聯關ある主要の人物や事項を試みに年表によつて示せば左の如くである。

天正一一 (三三四)	……	石川丈山生る
寶永一七 (三三〇)	……	一乗寺に詩仙堂就る。時に丈山五十八歳
正保 三 (三三六)	……	白幽子武州に生る
寛文 一 (三三二)	……	白幽子入山、時に十六歳
寛文一二 (三三三)	……	丈山歿す。享壽九十歳。時に白幽子二十七歳
貞享 二 (三四五)	……	白隱駿州原驛に生る
元祿 六 (三五五)	……	藤井象水の白幽子傳就る

- 元祿 八 (二三五) …… 白幽子の眞蹟三社託宣就る。時に白幽子五十歳
- 元祿 一一 (二三八) …… 華陽白川山松風窟白幽子箴就る。時に白幽子五十三歳
- 寶永 六 (二六九) …… 七月二十五日白幽子歿す。享壽六十四歳
- 寶永 七 (二七〇) …… 正月中旬白隱、白幽子を白川に訪ふ(?)。時に白隱二十六歳
- 寶曆 七 (二四七) …… 夜船閑話就る。時に白隱七十三歳
- 明和 五 (二四八) …… 白隱遷化す。時に八十四歳
- 明治三四 (二五二) …… 白幽子の墓碑竊去せらる
- 明治三六 (二五三) …… 白幽子の墓碑新造せらる
- 明治三九 (二五六) …… 白幽子巖居之碑就る

【註】

- ① 『夜船閑話』なる書名は恐らく、京を見たるふりする者白河の事をきかれ、白河には船通ぜざるに、夜船にて通りたれば知らずと答へたといふ「白河夜船」の故事に取材したものであらう。白隱の著想の輕妙を窺ふに足る。
- ② 淨土宗。左京區北白川仕伏町。
- ③ 大阪市森繁夫氏藏。これに就いては既に同氏が『文藝春秋』(昭和十四年十一月)に於て「白幽子」の題下に登載せられたが、私はなほ詳しく示教を受けたから茲にそのまま擧げることとした。

④ これは原本を摸寫したもので、白幽子の眞蹟といつても書體からいへば、嚮の「白幽子箴」よりも巧に書かれてゐる。

⑤ 昭和七年北白川禪法寺上梓「北白川名勝古蹟之一」（白幽子之卷）に據る。

⑥ 森繁夫氏「白幽子」。

⑦ 若し白隱訪幽の事件を東山天皇の御宇とすれば、この時白幽子はまだ存命してゐたのであるから、この事實は歴史的に容易に承認でき、吾吾も斯くあれかしと願ふところであるが、これを可能ならしむるには、白幽子の歿年寶永六年は到底動しえないから、白隱訪幽の年紀寶永七年を何らかの根據ある理由によつてただ一年だけ溯らしめればよい譯である。従つて、この點で『夜船閑話』記載の年紀の確否を疑はざるを得ない。

⑧ 丈山の墓碑は門人平岩仙桂の墓とともに洛北一圓を俯瞰しうる景勝の地に存する。丈山は生前この一大石を山中に索め、柳谷野子苞をして碑文を草せしめた。

⑨ 茲に謂ふ所の末弟とは高弟に對する末弟の意味にも解せられるが、石川克が末弟とは考へられない。

註⑦参照。